

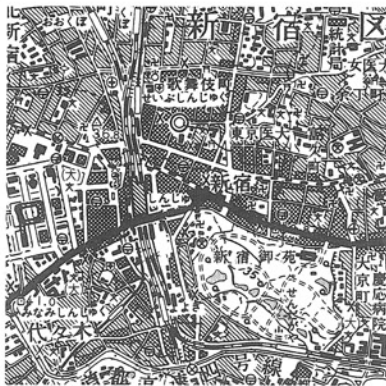
東京・天龍寺遺跡

てんりゅうじ

- 1 所在地 東京都新宿区新宿四丁目
- 2 調査期間 二〇〇二年(平14) 四月～五月
- 3 発掘機関 (財)新宿区生涯学習財団
- 4 調査担当者 大八木謙司・野本賢二
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代後期～明治時代初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は新宿区の西南端、JR新宿駅の東約三〇〇mに位置する。

延宝年間(一六七三～一六八一)までは千駄ヶ谷村の入会地となつて



(東京西北部)

いたが、天和三年(一六八三)牛込から移転した曹洞宗の寺院、護本山天龍寺の敷地となる。天龍寺は江戸城から見て裏鬼門の位置にあたり、幕府の保護も篤く、徳川家に最も関わりの深い寺院の一つであった。天龍寺は現在も調査地の南側に

所在する。

今回の調査はビル建設に伴うもので、調査区は東西約四〇m南北一五m、調査面積は約六二〇㎡である。調査の結果、池(六〇号遺構・土坑・ごみ穴・植栽痕などの遺構を検出し、文献や絵図には現われない寺院庭園の一部の発見という大きな成果を上げることができた。また、これによって調査地が天龍寺門前町屋に近い庫裏の北東部分であることが明らかになった。

木簡は、池(六〇号遺構)から四点出土した。池は、調査区の南東部に位置し、東西一九・五m以上、南北八・五m以上、確認面からの深さは最大で〇・九mを測る。平面形は、不整形円形や不整形など複数のブロックからなり、全体として「心」字状を呈する。中島や外郭線には乱杭による護岸が施されていた。江戸時代の絵図や文書には池の存在は知られていないが、池は天龍寺旧境内の北東部に位置する。埋土には肥前系と瀬戸・美濃系を中心とする陶磁器類、下駄・箸・桶樽などの木製品、寛永通宝を中心とする銭貨(一部は緋銭状をなす)、瓦など、江戸時代後期の遺物が多量に含まれており、幕末から明治時代初頭にかけての池廃絶時に埋められたごみとみられる。最終的な廃絶は、明治になってから輸入されるブタの骨が出土することから、一八七〇年代から八〇年代にかけてであろう。

なお、遺跡全体の遺構から、肥前系陶器小鉢が多く出土しており、一部の高台には「衆寮」「茶堂」などの墨書がある。そのほとんど

が寺の施設（建物）の什器として使われていたと推定される。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 納豆
四ッ谷
天龍寺
径138×厚3 061
- (2) 明
吉
松
煙草店
事負吉
治問屋
品
明
- (3) 若松
安
安
安
めで
む
235×77×6 011
- (4) 箱あせ
157×53×8 061

(1)は塩納豆の容器の曲物蓋板である。材はトウヒ属。木目と直交する方向に文字を記す。天龍寺文書によると、天龍寺では幕府関係者や檀家に対する歳暮や年始の贈答用に塩納豆を製造していたことが知られ、不用品が廃棄されたのであろう。天龍寺と直接関わる数少ない遺物の一つである。

(2)は池上層から出土した。材はスギの板目材。上部中央に径2mmの穿孔があり、掛札とみられる。表記したもの以外にも多数の墨痕が認められる。「煙草店」「問屋」「品」以外は習書とみられるが、異筆・追筆の判断は難しい。

(3)は、箱物の部材の一部に墨書したもののか。材はスギ。

(4)は、桶または樽の側板に墨書したもの。材はモミ属。

9 関係文献

(財)新宿区生涯学習財団『天龍寺跡』(二〇〇四年)

(野本賢二)

